
燕子花（かきつばた）恋歌

猫目石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かきつばた
燕子花恋歌

【Nコード】

N6097T

【作者名】

猫目石

【あらすじ】

奈落との採取決戦から、ほぼ三ヶ月、村は平和を取り戻した。りんが、ふと草叢びらくを覗いてみると犬夜叉が・・・。

我のみや　かく恋すらむ　かきつばた　につらふ妹は　いかにかあるらむ

私ばかりが、こんなに恋焦がれているのだろうか。燕子花カキツバタのよう
に鮮やかで美しい彼女は、どんな気持ちでいるのだろうか。

作者未詳　　万葉集より出典

草叢くさむから覗のぞいて見えた長い白銀の髪。

てつきり殺生丸さまだと思っただの。

でも、違っただ。

近付いて見ると髪の中から犬耳がピヨコンと飛び出してる。

殺生丸さまと同じ白銀の髪に金の瞳。

いつも真っ赤なお着物の犬夜叉さまだ。

殺生丸さまの弟の犬夜叉さま。

邪見さまが云うには、犬夜叉さまは殺生丸さまと違って半妖だから、
さま付けなんてしなくて良いつて。

でも、あたしは、そんなの変だと思っ。

だから、楓さまや法師さまと同じように犬夜叉さまって呼ぶの。
珊瑚さんだけは、さま付けはやめて欲しいつて。

だから、失礼にならないように、珊瑚さんって呼んでるの。

腕を組んで草叢に寝転がってる犬夜叉さま。

目を瞑しむて寝てるみたい。

邪魔しないようにソツと遠ざかろうとしたんだけど。
気付かれちゃった。

「りんか。気にすんな。こっち来いよ」

「あ……でも、お邪魔なら」

「邪魔なんかじゃねえよ」

「じゃあ」

あたしが楓さまの処で生活するようになって、大体、三ヶ月くらい。
最初は犬夜叉さまを、全然、見かけなかった。

どうしてかっというつと、犬夜叉さまと仲良しのかごめさまが、お国
に帰っちゃったから。

今でも、あの時のことを覚えてる。

あれは奈落との最後の戦いだった。

殺生丸さまの爆碎牙と犬夜叉さまの鉄碎牙に攻撃されてドンドン弱
っていく奈落。

その時、四魂の玉を、かごめさまの破魔の矢が射抜いたの。

骨喰いの井戸の上に首だけになった奈落と破魔の矢で串刺しになっ
た四魂の玉が浮かんでたっけ。

あたし、殺生丸さまの横で邪見さまや琥珀と一緒に見てたの。

首だけになった奈落が消えたと思ったら、かごめさまの後ろに黒く
て丸い冥道が現われてね。

そして、かごめさまをゴツて呑み込んで消えちゃった。

それだけじゃなくて骨喰いの井戸まで消えちゃったの。

あの井戸を通って、かごめさまと犬夜叉さまは、かごめさまのお国
へ行き来してたんだって。

だから、あの井戸が無いと、とっても困るんだって楓さまが云って

た。

かごめさまが冥道に消えて直ぐ犬夜叉さまも後を追ったの。

殺生丸さまから譲ってもらった冥道残月破で刃の形の冥道呼び出して。

その後、三日間、犬夜叉さまは戻ってこなかったそうなの。

それから、どうしてかは判らないけど、かごめさまも戻ってこなかった。

あの時、あたしは、殺生丸さまに連れられて、邪見さまと一緒に村を離れてたから後で楓さまが教えてくれたんだっけ。

アツ、それからね、骨喰いの井戸は、チャンと元通りの場所に戻ってたよ。

あたし、楓さまに預けられたばかりの頃は、悲しくて泣いてばかりいたの。

でもね、殺生丸さまは約束通り、三日おきに逢いに来てくれて。

それから、泣かなくなったの。

今では村の暮らしにも慣れて楓さまのお手伝いを色々とさせて頂いてるの。

それでね、今日は楓さまに頼まれて菖蒲あしひを引きに来たの。

あのね、菖蒲あしひって邪気を払うんだって。

だから、五月四日の夜、軒のきの上に菖蒲を置くんだったって。

水辺で、一生懸命、菖蒲を引いたら犬夜叉さまが声を掛けてきた。

「りん、何してるんだ?」

「菖蒲を引いてるの」

「それ、菖蒲じゃねえぞ」

「エッ、違うの。でも、こつこつ形の葉っぱだったと思うんだけど」

「それはな、りん、菖蒲は菖蒲でも花菖蒲だ。匂いを嗅いでみる。全然、匂わないから」

犬夜叉さまに云われて引いた葉の匂いを嗅いでみると、本当だ、全然、匂わない。

「本物の菖蒲はな、ツンとする独特の匂いがあるんだ。チョツと待ってる」

そう云って犬夜叉さまが少し離れた水場に生えてた菖蒲の葉を鋭い爪でスパツと刈り取ってくれたの。

殺生丸さまと同じ鋭い爪、やっぱり兄弟なんだなって思う。

「ホレツ、こんなもんで良いだろ」

あたしには持ちきれないくらいの束を犬夜叉さまが手渡してくれた。

「あつ、ありがとう、犬夜叉さま」

プンと匂う菖蒲の清々（すがすが）しい匂い。

優しいな、犬夜叉さまって。

殺生丸さまと同じだ。

菖蒲引きは終わったから犬夜叉さまの側に座って水辺を眺めてたの。綺麗な紫色の花が水辺に一杯。

「じゃあ、あれは花菖蒲はなしよひがって云うんだね」

すぐ側に咲いてる花を指差して犬夜叉さまに聞いてみた。

「イヤ、違うな。りん、それは燕子花かきつばただ」

「エッ、違うの」

「花菖蒲も燕子花かきつばたも同じ水辺に生える。でもな、花の中に入ってる模様の色を見てみる。花菖蒲は黄色、燕子花は白なんだ」

そう云われてジッと花を眺めてみると、本当、この紫の花の中に入ってる模様は白だ。

あっちの方の花には黄色の筋のような模様が。

「詳しいんだね、犬夜叉さま」

「まあな、昔、お袋に教わったんで、これだけは覚えてる」

「フ〜ン、でも、どっちも綺麗だね」

「桔梗は秋に咲く花だけど燕子花かきつばたは燕つばめが来る頃に咲く」

何時の間にか春も盛りを過ぎ新緑が眩しい季節になっていた。燕つばめが子育ての為に忙しく飛び交う。

（そういえば、かごめに初めて逢ったのは春だった。ほんの一年前の事だったな）

犬夜叉はボンヤリと空を見上げて誰よりも逢いたい少女との出逢いを思い返していた。

らしくもなく物思う風情の犬夜叉を見て、りんは少し首を傾かしげた。そして、不意に思い当たった。

桔梗って・・・そうか、あの巫女さまだ。

あたしが睡骨と蛇骨しびとって二人の死人しびとに人質に取られた時、助けてくれた綺麗な巫女さま。

あの女ひとは五十年前に亡くなった楓さまのお姉さまだって聞いたっけ。

それから、昔、犬夜叉さまは桔梗さまと恋仲だったんだって。桔梗さまは昔の恋人、それで、かごめさまは今の恋人。

ウーン、難しい、良く判らない。

アツ、そうか、犬夜叉さま、かごめさまの事、思い出してるんだ。桔梗の花は巫女さまを、燕子花かきつばたはかごめさまを思い出させるんだ。その後、二人とも黙っちゃったの。

何を喋ったら良いのか判らなくて。

そしたら、犬夜叉さまが、燕子花かきつばたをジッと見詰めながら話し出したの。

「りん、お前、以前、殺生丸に連れられて空の上の城に行ったんだよな。それで、確か、冥界の犬に冥道の中に連れ込まれて息が止まっちゃったんだっつたよな」

「ウン、ていうかハイ」

「そんな時の事、覚えてるか？」

「エツ・・・と冥界の犬に捉えられたのは覚えてるけど。その後は、何処か暗い場所にズツと蹲すくまってたみたい。気が付いたら、殺生丸さまの御顔が見えて」

「その暗い場所、冥道、イヤ、冥界にいた時、りん、おめえは何を思った」

「うん・・・と、暗くて、とっても怖くて寂しかった。でも、きっと、殺生丸さまが来てくれるって信じてた」

「・・・そうか。じゃあ、かごめも、そう思ってたんだらうか」

「かごめさまも冥道の中に吸い込まれたんだよね。だったら、きつと、そうだよ。あたしが殺生丸さまが来てくれるって信じてたみたいに、かごめさまも犬夜叉さまが来てくれるって信じてたと思う」

あたしのお話を聞いた後、犬夜叉さまは暫く口を利かなかった。腕組みしてジツと何かを考えてるみたい。

それから、何かを吐き出すみたいに話し出したの。

「かごめが四魂の玉を消した後、俺はかごめと一緒に、あいつの国に戻った。かごめの母親や爺おじい、弟が、かごめの身を案じてたからな。俺は、かごめと抱き合って泣いて喜ぶ家族の姿を見た。すると、急にゴツて音がして俺は何か大きな力に引き摺られるように、こっちの世界に戻ってたんだ。それから、骨喰いの井戸はウントもスンとも云わねえ。前みたいにな、かごめの国に行けなくなっちゃった」

「犬夜叉さまは、かごめさまに逢いたいんだよね。それに、かごめさまも、きつと犬夜叉さまに逢いたいと思ってるんじゃないかな。あたしが、何時も、殺生丸さまに逢いたいと思ってるみたいに」

「……そうだろうか」

「ウン、間違いないよ。あたしが狼に噛み殺されて最初に死んだ時、あの時も暗い場所にいたの。まだ名前も知らなかったけど殺生丸さまに凄く逢いたかった。とっても寂しくて悲しくて。でも、真つ暗な中に光が見えて其処へ行こうとしたら目が覚めて。そしたら、殺生丸さまの御顔が見えたの。満月に照らされて白銀の髪がキラキラ光って凄く綺麗だった。お月さまと同じ金色の目がジツとあたしを見詰めてた。それから、初めて神楽かぐらに攫さらわれた時もそうだった。犬夜叉さまは知ってるよね。殺生丸さまが助けに来てくれたの。睡骨と蛇骨へびこっていう死人しにびとに攫さらわれた時も、そう。それから、殺生丸さま

のおつ母の城に行つた時も。曲靈まがつひに乗り移られて奈落の体の中に連れて行かれた時も、やつぱり、殺生丸さまが来てくれた。アレツ、何だか、あたしつて攫さらわれてばかりだね。でも、あたし、信じてるの。何時だつて殺生丸さまが来てくれるつて。だから、犬夜叉さまも信じて。何時か、きつと、かごめさまに逢えるつて」

犬夜叉さまが、不思議なモノを見るかのように、あたしを見てた。あつ、あたし、何か変なことを云つたのかな。

そしたら、犬夜叉さまが、何かに気付いたように急に上を見上げて云つたの。

「りん、どうやら、お前の待ち人が来たみてえだぜ。ホレツ」

空を見上げたら遠くに阿吽に乗つた殺生丸さまが見えたの。

邪見さまも居る。

何時ものように阿吽の尻尾に？まってる。

思わず走り出してた。

嬉しくて嬉しくて。

「信じる……か。へッ、あんな子供に教えられるとはな」

りんが放り出していった菖蒲の束を肩に担ぎ犬夜叉は楓の家に向かって歩き出した。

明日は端午の節句、前日の夜、邪気を払う為に軒のきに菖蒲を葺ふく。

刈りたての菖蒲の芳香が清々しく周囲に拡がる。

犬夜叉の心にモヤモヤと垂れ込めていた小さな暗雲も爽やかな菖蒲の匂いにスツカリ吹き飛ばされていた。

五月晴れの空の中、燕ひばりが高く低く飛び交かって夏の到来を告げていた。
了

2009・5・18・(月)・作成・
猫目石

(後書き)

(暦についてのチョツとした注釈)

新暦(太陽暦)と旧暦(太陰暦)では、かなりのズレが生じます。大体、一ヶ月くらいのズレですが、年によっては一ヶ月を切ったり、または、四十日以上違っていたりと、随分、幅が有ります。作中は戦国時代の設定なので、当然、旧暦です。ですから、明日は端午の節句(五月五日)という設定に致しました。

カキツバタ・かきつばた

【花言葉】：幸運は必ず来る

植物と花言葉のエピソード：

伊勢物語や万葉集、世阿弥の狂言に出てくるカキツバタは、ずっときてくれない恋人を待つ心情から、待てば「幸運は必ず来る」という花言葉になったとされています。英名はラビットイヤーアイリス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097t/>

燕子花（かきつばた）恋歌

2011年7月9日04時48分発行